

静岡文化芸術大学図書館・情報センターだより

新 知 人 故 温

Shizuoka University of Art and Culture Library News

2009.12 Vol.15

平成21年12月発行

発行所 静岡文化芸術大学 図書館・情報センター
〒430-8533 浜松市中区中央二丁目1番1号
TEL (053)457-6124 FAX (053)457-6125
<http://www.suac.ac.jp/library/>

Contents

■表紙

『アテネの学堂』 ————— ①

■図書館散歩

美術を読み解く ————— ② —こんなにある入門書

文化政策学部 芸術文化学科長、教授
尾野 正晴

障害者に学ぶ ————— ③ くらしの五感

デザイン学部 生産造形学科 教授
大学院 デザイン研究科 教授
学生部長
三好 泉

■特集

図書館・情報センターホームページ

「学習・調査役立ちサイト」 ————— ④

■巻末

図書館ニュース ————— ⑥



『アテネの学堂』 Raffaello, Sanzio画 フレスコ 1508-11年 770cm
『RAFFAELLO(イタリア・ルネサンスの巨匠たち20)』東京書籍, 1995. [702.37/I 88]

1509年、教皇ユリウス2世によりラファエロ（1483-1520）に与えられた最初の重要な仕事は、ヴァチカン宮「署名の間」の装飾であり、その中の一つが「アテネの学堂」である。ラファエロの、それに先立つレオナルド、ミケランジェロと異なるのはその空間構成、構想力にある。空間の曖昧さとその暗さに注目したレオナルドにも、空間の廃棄に貢献したミケランジェロにも欠けて、ラファエロに恵まれていたものである。この広々として釣り合いのとれた空間こそ、神の秩序に宇宙の整合性と自然界の素朴な観照と、歴史的時間の感覚とを同時に体験させるまたとない背景になったものだ。教義と理性と歴史との三つの真理を統合しようとするルネッサンスの勢いは、この空間の感覚（遠近法的構造）の中で始めてほんのわずかの間、完成を見たのだった。

この図像群の未曾有の豊富化は、自然界との関わり合いを失い、無限に自己増殖する形体の理念の迷宮に、彼が踏み迷っていった結果である。古典的空間感覚そのものが壊れてしまい、それ自身を目的とする図像群の雑踏する世界—すなわち、マニエリズモの世界に完全に入りこんでいる。

美術史家は現在、ルネッサンスが終り、マニエリズモの始まる年を1520年としている。それはラファエロが37歳で世を去った、その年である。

なお、この「アテネの学堂」はあらゆる知の先人の肉声がこだまする空間としての館—図書館の理想像の具現化ともみられるであろう。

【参考文献】

*若桑みどり『ラファエロ(新潮美術文庫3)』新潮社.1975. [723.08/Sh61]

*B.サンティ著、石原宏訳『RAFFAELLO(イタリアルネサンスの巨匠たち20)』東京書籍.1995. [702.37/I 88]



文化政策学部 芸術文化学科長、教授

尾野 正晴

Ono Masaharu

美術家以外の著者による入門書

ギョルク・シュミット[著]；中村二穂[訳] 『近代絵画の見かた： ドーミエからシャガールまで』 723.02 / Sc 5
ケネス・クラーク[著]；高階秀爾[訳] 『絵画の見かた』 720.79 / C 76
本江邦夫[監修] 『すぐわかる画家別抽象絵画の見かた』 723.07 / Mo 83
本江邦夫[著] 『中・高校生のための現代美術入門： ●▲■の美しさって何？』 723.07 / Mo 83
千足伸行[著] 『すぐわかる20世紀の美術： 702.07 / Se 75
井出洋一郎[監修] 『絵画の見方・楽しみ方： 巨匠の代表作でわかる』 723.3 / I 19
山口裕美[著] 『現代アート入門の入門』 702.07 / Y 24
藤田令伊[著] 『現代アート、超入門！』 702.07 / F 67
菅原教夫[著] 『現代アートとは何か』 購入手続き中
山梨俊夫[著] 『現代絵画入門： 二十世紀美術をどう読み解くか』 081 / C 64 / 1458
山梨俊夫[著] 『絵画を読み解く10のキーワード』 720.4 / Y 35
フランク・ウィットフォード[著]；木下哲夫[訳] 『抽象美術入門』 723.07 / W 68
美術出版社編集部編；梅田一穂 [ほか] 執筆 『現代美術入門：国内コレクションで 見られるゴヤからシュナーベルまで』 702.07 / B 42
スティーヴン・リトル[著]；藤野優哉[訳] 『「…イズム」で読みとく美術』 702.3 / L 71

美術を読み解くーこんなにある入門書

世に入門書と称する書物は多い。最近では哲学や社会学の分野にも入門書が氾濫しているが、混迷を深める昨今においては、混迷の原因を探り、混迷から抜け出す手立てを求める読者が多い、ということなのだろうか。もっとも入門書を読んだために、まわりの世界ともども自分の頭まで混迷の度を深めてしまう例もあるので、入門書も油断大敵である。ここでは、美術というマイナーな分野における入門書を紹介するが、その際、我が国の作り手（美術家）自身による入門書に焦点を当てることにする。主に取り上げる美術家は、赤瀬川原平（尾辻克彦）と森村泰昌の2氏となるだろう。いずれも優れた書き手だが、とりわけ赤瀬川氏は「芥川賞」（1981年）の受賞者であり、れっきとした文学者でもある（ちなみに、「泉鏡花文学賞」＜2008年＞の受賞者である横尾忠則氏にも、『名画感応術』＜光文社＞という入門書がある）。

＜赤瀬川原平による入門書＞

- ・『赤瀬川原平の名画読本 鑑賞のポイントはどこか』（光文社）
- ・『名画読本 日本画編』（同）
- ・『日本にある世界の名画入門』（同）
- ・『赤瀬川原平の名画探検 印象派の水辺』（講談社、同じシリーズとして、『フェルメールの眼』と『ルソーの夢』もある）

赤瀬川氏の入門書には難解な言い回しもなく、読み物としても面白いが、ときおり考えさせられるような指摘がある。たとえば、「…絵の傑作というのは、それ自体の完成度というより、見る人に内在する力をどこまで活性化させるか、その能力にかかっているんだと、この絵（モネの「エトルタのマンヌポルト」）を見ながら考えた。…」(『印象派の水辺』)、「…抽象絵画は表現の自由の天国であるはずなのだけど、何故か自由の嬉しさを感じられないのはどうしてだろう。むしろ自然描写に結びついた印象派の絵の筆力の方に、自由の嬉しさを感じるのは何故だろうか。…」(同上) などである。

＜森村泰昌による入門書＞

- ・『時を駆ける美術 芸術家Mの空想ギャラリー』（光文社）
- ・『超・美術鑑賞術／お金をめぐる芸術の話』（筑摩書房）
- ・『踏みはずす美術史 私がモナ・リザになったわけ』（講談社）
- ・『美術の解剖学講義』（筑摩書房）
- ・『＜美しい＞ってなんだろう？ 美術のすすめ』（理論社）

森村氏の入門書の多くは自作を語る書にもなっているが、ここにも、「…一枚の絵がわかるというのは、その絵のなかになにに有益なもの、美術書に書かれているような説明を見出すことではなくて、…人それぞれの好きになり方を発見していくことなのでしょう…」(『美の解剖学講義』)という大切な指摘がある。

＊

美術家は言葉を操る人ではないという通説がいつごろまで通用していたのかよく分からないが、たとえば、後期印象派の画家（セザンヌ、ゴーギャン、ゴッホ）には手紙をはじめとする優れた文章表現があり、カンディンスキー、モンドリアン、クレーには優れた理論書とでもいべきものがあった。近代美術にあってこの成果なのだから、現代美術にいたってはいわずもがなである（我が国にも、中村一美、彦坂尚嘉、岡崎乾二郎をはじめとする論客／現代美術家がいる）。作品を最も良く語る者は一体誰なのか。作り手自身？それとも美術館学芸員？あるいは美術史家？いずれにせよ、作品自身が語るのを待ち続けるわけにはいかない観客には導き手が必要である。それが誰であるかは別にしても。最後に、美術家以外の著者による入門書（欧米の近現代美術が中心、事典類や教育関連の書籍は除く）も紹介しておこう。「…実践よりも理論に関心の偏った著者が美術について書いた本のなかには、物を見て美しいと感じる根源的な喜び、芸術的な創造性のなかでもとくに大切な行為である美的体験を無視したり、ときにはこれを否定したりするものもあるようです。…」(『はじめての美術史』) という指摘を思い起こしながら、作り手による入門書と比べてみるのも一興だろう。

＊

最後に一言。手前味噌になるが、かくいう私は、アメリカの現代美術家フランク・ステラの講義録『ワーキング・スペース 作動する絵画空間』（福武書店）を辻成史氏とともに監訳した。現在入手することは難しいし、入門書でないので中味も難しいが、幸いなことに本学の図書館に収蔵されている。現代絵画をより深く学びたい人には必読書のひとつだと思う。



デザイン学部 生産造形学科 教授
大学院 デザイン研究科 教授
学生部長

三好 泉
Miyoshi Izumi

本文中に登場した資料

E&Cプロジェクト編
『ヒトに優しいモノ作り
(「バリアフリー」の商品開発；1)』
675.3 / I11/1

E&Cプロジェクト編
『超高齢社会を支えるモノ作り
(「バリアフリー」の商品開発；2)』
675.3 / I11/2

松井進著
『見えない目で生きるということ：
視覚障害者の暮らし接するためのヒント』
369.275 / Ma77

松森果林著
『星の音が聴こえますか』
369.276 / Ma81

田中聡著
『匠の技：五感の世界を訊く』
141.2 / Ta 84

大路直哉著
『見えざる左手：
ものいわぬ社会制度への提言
購入手続き中

バットムーア著；木村治美訳
『変装：A true story：
私は三年間老人だった』
936 / Mo39

ヴィクター・パパネック著；阿部公正訳
『生きのびるためのデザイン』
757 / P22

障害者に学ぶくらしの五感

温暖化のためなのだろうか、今までと季節感が違う。そんな中でも、秋の訪れは微かだがしつかりした虫の声に、また頬にあたる風に冬の気配を感じとることができる。季節の変化を見たり、聞いたり、肌で感じたりするように、私たちは昔から五感と呼ばれる身体感覚を使って心豊かな暮らしをしてきた。うちわや簾、火鉢や畳などくらしで使われる和の道具も五感を刺激し、五感の細やかさを育ててきた。けれども、快適性や利便性を追求し生み出されたハイテク製品や人工物に囲まれた現在、人の能力はたしかに拡大したが、五感に代表される身体感覚は忘れられた感がある。

そんなことに改めて気づかせてくれたのが視覚障害者との出会いだった。1980年代の終わりごろだからもう20年も前のことになる。ボランティア研究グループで視覚障害者の「朝起きてから夜寝るまでの不便さ調査」に取り組むことになり、手分けして全盲や弱視の方を訪問した。私も仕事が終わってから、暗くなりかけた街を地図を頼りに全盲の方の自宅を訪ねた。出迎えてくれた方はまったく目が見えないはずなのに、まるで自然に、話をしながら床に置いてあるものを避けて部屋に案内してくれる。ごく普通の光景かもしれないが、私は「えっ！違う人の家を訪ねてしまったの？」と感じたほど驚いた体験だった。特に聴覚、触覚や嗅覚などあらゆる感覚や記憶をフルに働かせる工夫やノウハウ、足の裏で感じる舗道のふくらみや柔らかさ、街の匂いや風、かすかな音などを生活の一つひとつの場面で生かしている話に新鮮なショックを受けたことを思い出す。

総理府の「国民生活に関する世論調査」で、「これからの生活で重視することは」の問いに「ものの豊かさ」よりも「心の豊かさ」であるとの回答がはじめて上回ったのが約30年前。ここ数年の調査では、「心の豊かさ」を求めるとする人は60%を超えている。

豊かさに対するデザインでのキーワードのひとつは五感の活用であろう。本学で力を入れているユニバーサルデザイン（UD）でも複数の感覚の活用は欠かせない要素だ。『バリアフリーの商品開発』の中で、木塚康弘氏（元本学デザイン学部教授）はものや環境などで「一つのものに複数の属性を」と提案し、「一つのものに複数の属性を付加してあれば、そのどれかを手がかりにできる、複数の属性は、・・・その物の豊かさを表している。」と述べている。多様な属性を持つUD製品や五感の達人である感覚障害者から学ぶことは多い。UD製品の配慮や工夫を「触って」「聞いて」「見て」・・・感じてみることで、さまざまな属性を感じ取れる感覚や感性を自分の中に見つけ、育ててゆくことが、健常者にとっても豊かな生活をおくる手がかりになるはずだ。感覚障害があるからこそ、使える感覚を目いっぱい活用している障害者の生活術に学ぶことも多い。最近では、視覚障害者の繊細な触覚を肌触りの良いタオルの商品開発に活用するなど、感覚障害者が持っている鋭い感覚を製品開発に生かした事例もある。

障害者のくらしや考え方、生活術についてはさまざまな本が出版されている。たとえば、全盲者の生の生活を知ることができる『見えない目で生きるということ』やデザインを学んだ聴覚障害者のエッセイ『星の音が聴こえますか』、五感の達人のインタビュー集で全盲の人の歩行術も収録されている『匠の技』など気軽に読める。「見えるものを聞く、聞こえるものを見る」そんなことがこれからの社会における豊かなデザインを考えるときのヒントになるのではないと思う。また五感からは外れるが、左利きの人の提言『見えざる左手』、26歳の女性工業デザイナーが80歳の高齢者に変装することで見てきた社会を描いた『変装－私は3年間老人だった』などもデザインの対象となる多様な人々を理解するのによい。

気軽に読めるものばかり紹介したので、読書の楽しみの一つである思考を刺激する書籍も紹介したい。巻頭「多くの職業のうちには、インダストリアルデザインよりも有害なものもあるにはあるが、その数は非常に少ない。・・・」で始まるヴィクター・パパネックの『生きのびるためのデザイン』は30年以上前の著作であるが、今でも示唆に富んでいる。デザイナーであり教育者であった著者は、「よくデザインされたものはたくさんある。だが、デザインの悪いものはそれよりはるかに多い。そして、まだ全然デザインの対象にされていないものは、本当に驚くほどたくさんある。・・・」として低開発国や障害を持つ人のデザイン等の分野で幅広い活躍をした。私の学生のころと比べ今の学生生活はなにかと忙しいようであるが、学生の今の時期に読んでおくべき本もある。自分の一冊を見つけるために図書館を活用してほしい。

図書館・情報センターホームページ「学習・調査役立ちサイト」

図書館・情報センターのホームページにある「学習・調査役立ちサイト」をご紹介します。

これは、皆さんの学習・調査や教養を深めるのに役立つWebサイトを集めたリンク集です。今回はその中からピックアップしてご案内します。これまでにこのコーナーで紹介したデータベースなどと組み合わせて活用してください。

学習・調査役立ちサイト をクリックしてください⇒



アリアドネ (ARIADNE)

<http://ariadne.jp/>

《分野別学術情報源 (全分野)》

翻訳者である二木麻里氏のサイト。主に人文・芸術や社会科学の領域に属するWebサイトを集めたリンク集。海外の情報源を主体に、国内発信の基幹リソースなどを加えて構成されている。

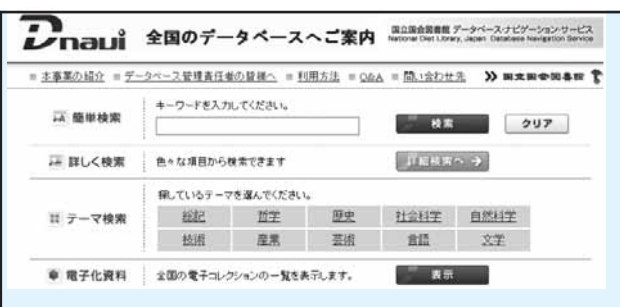


Dnavi

<http://dnavi.ndl.go.jp/>

《分野別学術情報源 (全分野)》

国立国会図書館のデータベース・ナビゲーション・サービス。Web上の各種データベースへのリンク集。タイトル、作成者、分類、内容説明等から検索することができる。



J-STAGE

<http://info.jstage.jst.go.jp/>

《雑誌記事・論文検索》

独立行政法人科学技術振興機構(JST)が運営する電子ジャーナルサイト。最新の論文や、過去に出版された論文を検索・閲覧することが可能。引用文献リンク機能により、論文が引用している文献を参照することもできる。



e-Stat (政府統計の総合窓口)

<http://www.e-stat.go.jp/>

《分野別学術情報源 (社会科学)》

独立行政法人統計センターが運営する、政府統計のポータルサイト。各府省等が登録した統計データ、公表予定、新着情報、調査票項目情報などの各種統計情報を利用することができる。



e-Gov（電子政府の総合窓口）

<http://www.e-gov.go.jp/>

《官公庁・政府刊行物・国際機関―首相官邸》

総務省行政管理局が運営する、総合的な行政ポータルサイト。各府省がWebサイトで提供している行政情報の横断的な検索や、法令（法律・政令・省令など）の内容検索が可能。

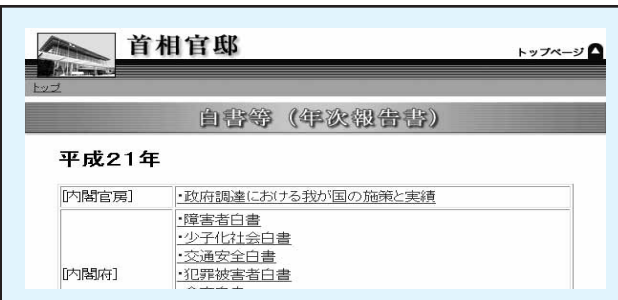


白書等（年次報告書）

<http://www.kantei.go.jp/jp/hakusyo/>

《官公庁・政府刊行物・国際機関―政府刊行物》

首相官邸ホームページにある、さまざまな白書等へのリンク集。各府省等がWebサイト上に公開している白書や年次報告書の内容を、最新版からバックナンバーまで閲覧することができる。

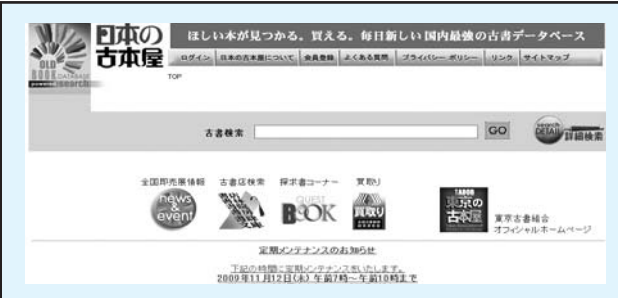


日本の古本屋

<http://www.kosho.or.jp/>

《出版社・書籍検索―古書》

東京都古書籍商業協同組合が運営する、古書販売の総合サイト。全国のお書店をネットし、書名や著者名から在庫を検索できる。絶版や品切れで入手できなかった本も、このサイトで探せば見付かるかも…



日本国内の大学図書館関係WWWサーバ

http://www.libra.titech.ac.jp/libraries_Japan.html

《図書館―国内》

東京工業大学附属図書館が運営するリンク集。国内の大学図書館をはじめ、研究教育機関や各種協議会・研究会等のサイトも登録されている。地区別、ABC順に表示することも可能。



文化遺産オンライン

<http://bunka.nii.ac.jp/>

《博物館・美術館》

文化庁が運営する、わが国の文化遺産についてのポータルサイト。全国の美術館・博物館等から提供された情報や、国指定文化財等に関するデータなどの情報を閲覧することができる。



これら以外にも、さまざまなWebサイトを収録しています。ぜひ、アクセスしてみてください。

◎本学新学長・熊倉功夫先生の著書を配架しました

平成22年1月1日附で本学の学長に就任される熊倉 功夫(くまくら いさお)先生の著書を配架しました。

日本文化史や茶道史が専門で、静岡県の歴史や風土・食文化にも造詣の深い熊倉先生の著書を多数揃えてありますので、ぜひ読んでみてください。

【熊倉功夫先生の著書】

『近代茶道史の研究』[791. 2/Ku33]

『寛永文化の研究』[210. 52/Ku33]

『千利休』[281/N71/15] など多数



◎入退館管理システムとBDSを更新しました

図書館出入口（エントランス）にある入退館管理システムとBDS(ブック・ディテクション・システム)を更新しました。

これまで、入館ゲートは手動でしたが、新しいシステムでは自動開閉となりました。

学生証（利用者証）をゲート右側のカードリーダーに通すと、緑のランプが点灯し、扉が自動で開きます。一度に2名以上が入館しようとする、扉が自動で閉まり、警告音が鳴ります。

カードの磁気ストライプにエラーがある場合、赤ランプが点灯し、扉は開きません。



◎図書館2階フロアの一部を模様替えしました

《新着雑誌・新着紀要コーナー》

新着雑誌コーナー(書架5連)をカウンター側に寄せ、その奥に参考図書の書架を2連増設しました。

従来この場所にあった**新着紀要は、1階の紀要バックナンバーのある「集密書架A」へ移動しました。**



《大型図書コーナー》

大型図書コーナーに、大型低書架1連を増設しました。

いずれも、これまでと配架場所が換わっていることがありますので、資料を探す場合・返却する場合はご注意ください。

